

まめ知識

あずき 「小豆のちから」

十夜粥・赤飯など、仏教行事で目にするお供え物には小豆がよく使われています。赤色の粒には魔除けの効果があるといわれ、亥の子餅など仏教以外でも特別な食材として使用されます。近年、脳卒中予防への効果が期待されるなど、その豊富な栄養素からも健康にいい食材の一つといわれます。かつて、貴重であった砂糖、米などと小豆を組み合わせた数々のお供え物には、ご先祖さまや阿弥陀さまへの感謝、無病息災を願う思いが込められていたのかもしれませんが。私たちはその思いを汲み、感謝の気持ちでお供えをしたいですね。



お経の勉強シリーズ 「日常勤行編」

この「お経」は「開経偈」と呼ばれるものです。日常勤行式の全体の中心は「念仏一会」ですが、それに次いで中心的役割を担うのが、經典の誦誦、いわゆる「読経」です。その「読経」に入る前にこの開経偈を唱えて「読経」の目的を再確認します。ところで、仏教に会うことは稀有のことと述べられていますが、現在は經典を見ようと思えば簡単に会うことが出来ます。なので違和感を覚えるのではないのでしょうか。しかしながら、そもそも經典を理解できるのは、六道のうち「人道」と「天道」に生まれた者だけなのです。また、仏教の広まっていけない地域に生まれながら仏教の教えに巡り合うのは難しくなります。

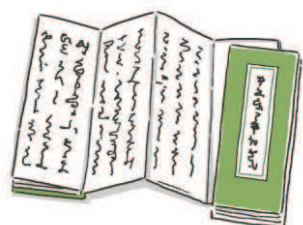
三句目に「見聞」と「受持」という言葉が出て参ります。「見聞」は見聞きすることですが、「受持」は見聞きしたものを記憶するという意味です。經典の内容を記憶するのが「受持」となります。

無上甚深微妙の法は、百千萬劫にも遭い会うこと難し。我今見聞し受持することを得たり。願わくは如来真實義を解し奉らん。

現代語訳
非常に深く素晴らしいことこの上なき仏教の教えではありませんが、六道を輪廻する中、百千万劫という長い、長い時間を経ても、逢うことは難しい。それにもかかわらず、私は今その教えを見聞きし、受け持つ機会を得ました。幸いにもそのような機会を得たのでからどうか仏の説かれた真實の教えの内容が理解できますように。

書き下し
無上甚深微妙の法は、百千萬劫難遭遇
我今見聞得受持 願解如来真實義

原文(開経偈)



出典元 安達俊英著「日常勤行式の解説」

当山山門について

当山の山門は、本堂と同時に建てられ、安政年間よりずっと源昌寺の象徴として、檀信徒及び寺門の歴史を見守り続けて来ました。

しかしながら、老朽化が進み柱や梁は朽ちており、倒壊の危険性があり、このままでは参詣者等の安全を確保出来ないため、総代会にて一旦は解体し、5〜6年後の本堂・山門大修復の際に建立し、新たな象徴となるようにと考えています。

これまでの長い歴史に感謝すると共に、これから取り組む大修復の安寧を願い、令和6年7月30日山門浄め式を執り行い、令和6年8月7日に解体をいたしました。



～浄土宗と三つ葉葵の紋～

浄土宗の寺院では宗紋の「月影杏葉」の紋と共に徳川家ゆかりの紋「三つ葉葵の紋」を掲げている寺院が数多くあります。よく、なぜ徳川家の「三つ葉葵の紋」があるのかとご質問を受けることがあります。それは、今から約500年前に遡ります。徳川家康公の高祖父(4代前の当主)の松平親忠公は、三河の地を統治する戦国大名になる礎を築いた方ですが、その忠親公のご子息、存牛上人が永正17年に浄土宗総本山知恩院25代目の住職となりました。江戸時代に書かれた「起立開山名前・御由緒・寺格等書記」によると、存牛上人は、法然上人の御遺跡に後白河法皇の命を受け住職に就任せしむ。松平家に生を受けその後出家し、法皇の勅許勅請を賜ることは名譽なり。我が名譽が松平家の名譽なれば、我が跡を後代に残さんため、当山(知恩院)の紋は後世に至るまで、我が元の姓の「葵紋」とすべし。と知恩院の寺紋を松平家の「葵紋」と定めたことが示されています。天下人となった家康公は、永世当家の葵御紋を知恩院(浄土宗)の御紋とし天下安全を祈願するようにと仰せになったと伝わっています。以来、浄土宗の各寺院に掲げられるようになったのです。

